

全ての日本人がよき人生を送れますように

「小さな親切」運動本部が発足した昭和38年、日本はまだ高度経済成長の真っただ中でしたが、その性急さが災いして、公害や交通戦争、地方の過疎化などの社会的な問題が姿を現し始めていました。茅誠司初代代表がこ

私は、海軍の主計将校でした。前線への補給を担当していたのです。終戦の頃は、武器の調達を行うために秋田県の田沢湖近くに横穴を掘り、そこを拠点としておりました。と言っても、材料がまったくないのでそこから武器なんて作れるわけがない。

怖いことは、それをみんなわかってやっているということなのです。太平洋戦争の開始時点ですえ、アメリカの戦力や経済力を把握していた人なら、開戦の愚を認識していたはずですが、しかし、大勢の声に反対意見は消されてしまいました。

組織というのは、そういうもろさを持っているのです。同じ状況を繰り返しているのと、緊張感や集中力はなくなり、モチベーションは低下し、やがてなにも考えない集団になってしまいます。

実は、今の日本でも似たような組織の疲弊が起きています。トップの無責任な経営で破綻してしまう企業は少なくありません。行政機関における「〇〇隠し」も日常茶飯事で、

学校では「いじめ」などというものも起きています。

こうした風潮に、私は懸念を覚えます。無責任とは、「思いやり」の欠如にほかなりません。友人に対する思いやり、部下に対する思いやり、ユーザーに対する思いやり。これらを欠くと、まったく自分勝手、後を考えない行動が生まれてしまいます。

思いやりと平行して、「小さな親切」運動が伝えてくれる言葉が「感謝」です。人に感謝をするときは、自分もとても幸せな瞬間です。やさしい言葉をかけてもらった。親切にしてもらった。日常生活のそういう何気ない人との関わりによって幸せを味わえれば、周囲の人にも幸せになれるでしょう。

しかし、この感謝センサーは鈍ってしまうこともあるのです。人に感謝をするということとは、まず人の存在を認めるということです。センサーが効かないと人を無視して、迷惑行為を平気ですまってしまうようになります。「小さな親切」は、この感謝センサーを磨くことができます。

これまで95年間の私の人生は、とても幸せでした。出会った一人ひとりの皆様のおかげだと心より感謝しております。同様に、全ての日本人がよき人生を送れますよう願っております。

(平成25年「小さな親切」誌・50周年記念特別号より抜粋)



篠原康次郎 前顧問を偲んで

去る2月7日、前広島県本部代表で、前中央本部顧問の篠原康次郎氏(99歳)がご逝去されました。広島県本部代表を24年間務められ、その後中央本部の顧問に。中央本部45周年記念式典では、長年にわたる熱心な運動の推進に対し、全国で第一人、篠原様を特別功労者として表彰させていただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

の「小さな親切」を標榜されたのは、こうした社会変化への対応、すなわち「モノ」から「心」への転換の必要性をいち早く見て取っておられたのだと拝察しております。

少々古い話になりますが、数少なくなった戦争体験者としてお話しさせていただきます。

ベーシオンは低下し、やがてなにも考えない集団になってしまいます。

実は、今の日本でも似たような組織の疲弊が起きています。トップの無責任な経営で破綻してしまう企業は少なくありません。行政機関における「〇〇隠し」も日常茶飯事で、

篠原康次郎(しのはら・こうじろう)

1918年生まれ。東京商科大学卒業後、日本銀行へ入行。1969年、広島相互銀行(後の広島総合銀行、現在のもみじ銀行)専務取締役任に就任し、2001年に退任するまで、取締役社長、取締役会長、取締役相談役等を歴任した。

1977年、「小さな親切」運動広島県本部発足と同時に代表に就任し、先頭に立って広島の豊かな心づくりに尽力。その他、公益社団法人「小さな親切」運動本部顧問をはじめ、在広島オーストリア共和国名誉領事、広島県日中親善協会会長としても活躍された。藍綬褒章、勲三等瑞宝章受章。